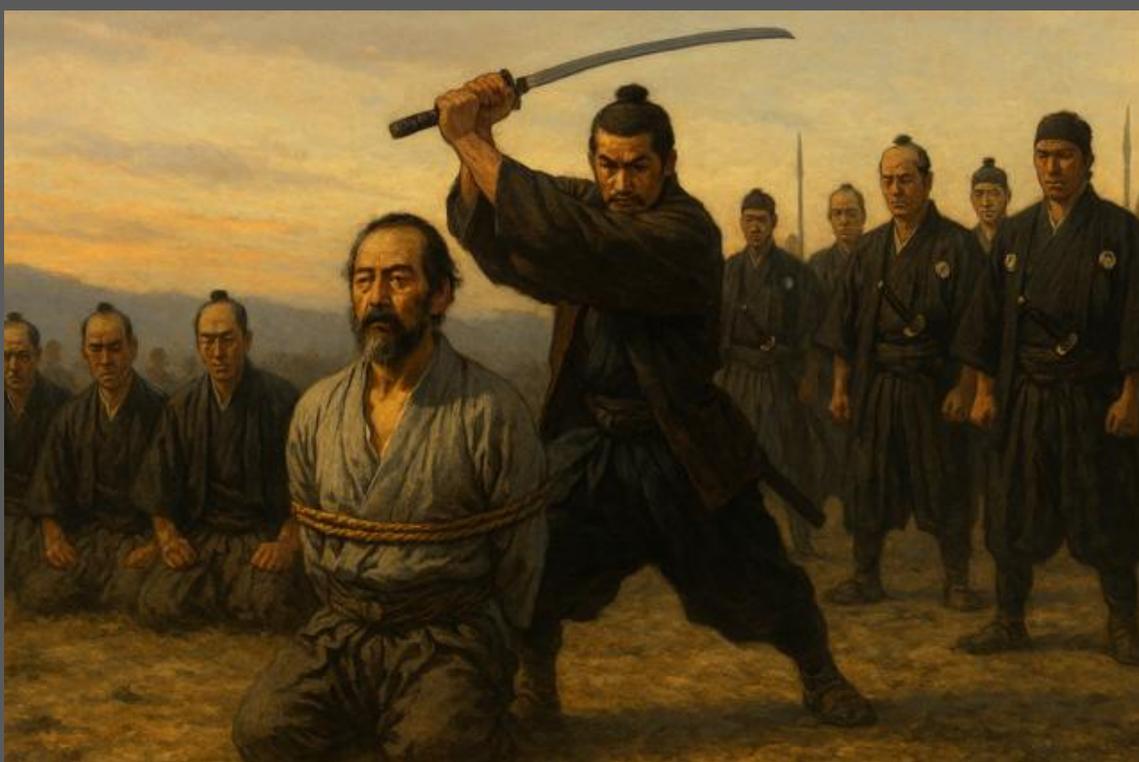


街角の歴史小説

『首斬り三篇』



石井建志  
・作

## 「首斬り三編」

はじめに

『首を斬られた』という言葉は、現代では解雇を指す比喩的な表現として耳にすることもありますが、江戸時代には実際に罪人の首を刃物で切り落とす『斬首刑』として存在していました。

平安時代において、身分に関係なく斬首刑が一般的でありましたが、戦国時代には切腹文化が発展し、切腹直後に首を切り落とす介錯が行われるようになりました。

私は自費出版『あなたも知らない 池袋の今昔物語』を執筆しているときに、死刑執行人「山田浅右衛門」のお墓が祥雲寺にあることを知りました。十八世紀前半の江戸幕府第八代将軍・徳川吉宗の時代から一八七九年（明治十二）まで、山田浅右衛門は世襲で九代続いた山田家があったのです。御様御用（おためしごよう）という刀剣の試し斬り役を務める傍ら、死刑

執行人も務めていたのです。

七代目の山田浅右衛門吉利のときに吉田松陰など安政の大獄の処罰を刀で執行したと知り、いつか小説の材料にしようと思いついたのです。

因みに、この斬首刑で山田浅右衛門が打ち首にした最後の罪人は「高橋お伝」と言う美しい女性でした。金を工面してくれるはずの男に裏切られて殺害に及んだ罪で斬首刑が執行、「毒婦」との悪評が付けられた事件ですが、「平成の毒婦」木嶋佳苗（死刑確定）などと比較したら軽罪だと思えます。

山田浅右衛門が打ち首にした「吉田松陰」「橋本左内」の物語①。浅右衛門の執刀ではないが、幕末に武士なのに切腹ではなく斬首刑となった「近藤勇」②と「小栗上野介忠順」③の事件。

以上、①から③の短編三話をこの『首斬り三篇』として、まとめてみました。

本書を通じて、歴史に刻まれた『斬首刑』が持つ社会的意味を考え直すきっかけになれば幸いです。

「首斬り三篇」第一話

死刑執行人 山田浅右衛門が斬った志士



【安政の大獄】

志士の首が落ちる時、時代は動いた。

伝馬町牢屋敷の白布の向こう、山田浅右衛門は刀を握り締めた。この一振り、志士の想いは潰え、時代は次の齒車を回した。

\*\*\*

安政五年（一八五八）の秋、江戸城西の丸、大老執務室。障子越しに射す薄日の中、畳の間にはぴんと張り詰めた空気が漂っていた。

「・・・吉田松陰、死罪に処す。橋本左内も同様だ」

井伊直弼は、冷やかな口調でそう言い放った。白鞘の脇差を膝に据え、少しも視線を逸らさぬまま、家臣たちの面を見渡す。

「は・・・」

膝を揃えた側近たちが一斉に頭を垂れた。誰もが内心にざわめきを抱えながらも、命に背くことは許されない。

「井伊様・・・松陰は、かつて密航未遂を起こしましたが、すでに萩で謹慎の身。橋本左内も、ただ志を述べたにすぎませぬ」

若い側近が、思わず口をはさんだ。声は震え、手のひらは汗ばみ、背には冷たいものが走る。

「志？」

井伊は眉ひとつ動かさず、わずかに口角を歪めた。

「志などというものは、時に民を惑わし、世を乱す。松

陰も左内も、すでに毒だ。今、この毒を断たねば、この国は潰れる」

「しかし……！」

「ならば、そなたが首を差し出すか？」

井伊の声が低く、鋭く部屋を突き刺した。その瞬間、若者は言葉を呑み、畳に手をついたまま動けなくなった。

静寂が戻る。

やがて井伊はそっと立ち上がり、障子を開け放つ。

秋の風がふと吹き込み、金木屋の香りを運んだ。

「命じよ。伝馬町牢屋敷へ、死刑執行人・山田浅右衛門を呼べ」

その名を耳にした時、空気がまた一段重くなった。それは、『斬る者』の名である。

浅右衛門とは、死の影を背負う者。幕府に属さぬ浪人でありながら、武士も恐れぬ剣を持つ。罪人の命を一刀で断ち、屍を試し斬りに使うこともある、異形の男――。

遠くで、町の鐘が時を告げていた。

時代が、静かに音を立てて傾き始めていた。

安政の大獄とは、安政五年（一八五八）から翌年にかけて、大老・井伊直弼が行った大規模な政治弾圧である。背景には、日米修好通商条約の締結をめぐり『尊皇攘夷』を掲げる朝廷との対立、将軍継嗣問題などがあつた。

幕政に異を唱えた大名、公卿、藩士、学者ら百名以上が処分され、その中には吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎など後に維新に繋がる志士も多く含まれていた。

江戸の庶民の目には、この騒動は『突然の粛清』と映つた。――白昼堂々と押し込まれる奉行所の籠、斬首刑を告げる触れ太鼓、牢屋敷の上に立つ黒い幟などから、街には不穏な空気が流れ、「国がどこへ向かうのか」という不安が日常に溶け込んでいった。

だが、名を秘しながらも多くの者が、「逮捕、死罪に処せられた人らの言うことにも、一理はあつたのではないかと、胸の内では呟いていたという。

### 【死刑執行人 山田浅右衛門】

江戸・麴町、平河町一丁目二番。

そこには、町人も旗本も決して近づこうとはしない屋敷があった。死刑執行の夜には亡霊も現われるとの噂から、夜な夜な灯を煌々と点し、一晚中酒を交わし、笑い声が漏れ聞こえていた。だがその屋敷に、客は来ない。商いの声も、風鈴も、門付けの三味線も届かない。

——それが、「山田浅右衛門邸」であった。

屋敷の主は、七代目・山田浅右衛門吉利。

「山田浅右衛門」という名は、代々世襲で受け継がれてきた『屋号』である。

正式な幕府の役職ではなく、役職は持たぬ浪人である。また、あくまで「御様御用」として刀剣の試し斬り、そして斬首刑を担っていた。

「親方……今夜も斬るのですか」

縁の下に置かれた刀を手にした若弟子・文吉が、声をひそめる。

「そうだ。今宵の『ためし』は駿河守拵え、五尺三寸の太刀よ。肥後の国からの業物だそうだ」

吉利は、面相に笑みを浮かべながら答えた。だがその目は笑っていない。

奥座敷の障子越しには、白布に包まれた人の形が横たわっている。それは『ためし』のために用意された、今朝ほど処されたばかりの罪人の死体だ。

「死とは、道具のように扱えるもののですか……」

文吉の声は、どこか震えていた。まだ年端もいかぬ文吉には、目の前の職がただの「仕事」には見えない。

「道具か、神か、あるいはただの肉か……それを決めるのは、我らではない。そうさな、世の理（ことわり）じゃ」吉利は、畳の上に座して刀を抜いた。冷たい光が部屋を裂くように走る。

「人は死ぬ。罪を背負えば斬られる。それがこの世の形よ。だがな、文吉。せめてその死を、鈍らぬ刃で仕上げる。それが、わしらの務めだ」

文吉は何も言えず、ただ頷いた。

屋敷の外では、秋の虫が鳴いていた。

その静けさの中、浅右衛門は黙々と刀の刃を確かめ、手入れを始める。

彼にとって、それは祈りにも似た所作だった。

——明日、吉田松陰が送られてくる。

——その後には、橋本左内が続くという。

誰もが名を知る志士を斬るということ。それは名誉か、業か。その答えを、吉利自身もまだ知らない。

ただ、吉利は刀を握る。世が求めるならば、刃を振るう。それだけのことだった。

### 【二人の志士を斬る】

嘉永七年（一八五四）黒船が来た。そこから始まる動乱の時代の只中で、二人の男がその命を絶たれようとしていた。

\*\*\*

安政六年十月二十七日——江戸・伝馬町牢屋敷。空は曇り、風もなく、まるで時間さえ止まっているようだった。牢屋敷の中庭に張られた白布の幕、その奥に、一人の男が膝をついていた。

吉田寅次郎——世に名高い、吉田松陰である。

松陰の罪は「老中暗殺計画の企図」と「外国船への密航未遂」で、本来なら遠島か謹慎で済むはずが、時の政権にとって松陰の存在は『思想という火種』であった。

松陰は獄中でも講義をやめず、弟子たちに孟子を講

じ、国の在り方を語った。

「どうか、刀はよく研がれていると信じたい」

そう言って松陰は、微かに笑った。その顔には、これから斬られる者の恐れなど一片もなかった。

「吉田殿……」

背後で控えていた文吉が、思わず声を漏らす。だが、声を止めるように、山田浅右衛門吉利は手を軽く挙げた。

「余計な情けは、刃を鈍らせるぞ」

「辞世の句を詠んでよいか？」と松陰は吉利に願う出る。

「……どうぞ」

松陰は、天を仰ぎ、澄んだ声で詠んだ。

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも

とどめ置かまし大和魂

（たとえ自分の肉体は朽ち果てようとも、魂は

この国のために残したい。）

刃を握る吉利の眼に、一瞬、波紋のようなものが揺らいだ。だが、次の瞬間にはそれを断ち切るように、一

歩前へ進み出た。

——スツ。

音はなかった。血も飛ばなかった。首は静かに落ち、体はぐらりと前へ倒れた。

吉利は「……成仏されよ」と言い、手を合わせた。

「……御苦勞であった」

吉利は低く、誰にも聞こえぬ声でそう呟いた。

\*\*\*

そして十日後の十月七日——同じ牢屋敷にて、また一人の男が命を絶たれた。

橋本左内——

左内もまた、最期の時を迎えていた。

左内は福井藩の俊英であり、緒方洪庵の門下として医術を学ぶ傍ら、幕政の腐敗を正すことを目指し、井伊直弼の独裁政治に批判の声を上げていたため、斬首刑に処せられた。時に二十六歳。

左内の罪は「幕政批判」であり、「將軍継嗣問題への干渉」だったが、裏を返せばそれは「意見を持った」ことに他ならなかった。

「生きてゆけば、医者としてまだ多くの人を救えたか

もしれぬが……運命とは無情なものよ」

処刑台の上で、左内は最後まで凜としていた。

眼前の死を見つめながら、左内は何度も空を仰いだ。

「人は、夢を抱いて死ぬことができるのか。いや、それが夢の証明なのかもしれぬな……」

吉利は、この若者を気にかけていた。目には光があった。信念があった。

だが、斬る。

左内はまっすぐ前を見据えた。恐れはない。ただ、心残りだけがわずかに顔を曇らせる。

吉利が近づくのを見て、左内は静かに息を吸った。

「拙きながら、辞世を」と左内は申し出た。

その声は、秋の風よりも澄んでいた。

夢ざめて 起きて見る世のうれしきは

仇と知りつつ なほ目覚むなり

(夢から醒めたように、現世の儚さを知っても、なお目を覚まして生きようとする想い。)

静かに歩み寄り、左内の背後に立った。

「どうか、あの世で再び学問の続きを」

「では……」

刃が振り下ろされる刹那、橋本左内の口元がわずかに笑った気がした。

死を恐れずに、受け容れる者の顔。吉利の胸に、何か小さく沈んでいった。

一刀のもとに、左内の首が地に落ちた。

処刑場の幕の外で、ぽつりと雨が降り始めていた。

「・・・御霊やすかれ」

遺体を包む白布に、雨がぼつぼつと染みていく。

牢屋敷の門が出る頃には、吉利の肩もすっかり濡れていた。だが、傘は差さなかった。

「命を斬るとは、何を斬ることか・・・」

誰に向けるでもなく、吉利は呟いた。

\*\*\*

二人の最期は、静かに、堂々と、死を恐れず、辞世の句を残してこの世を去っていった。

### 【供養塔の下にて】

死刑執行人は、死の穢れを伴う役目だったこと、死体の売買による副収入が得難いことから幕府の役人とはならず浪人として貰いたまものの、裕福な生活だったと

言われている。この家業は世襲ではないものの、江戸幕府第八代將軍徳川吉宗の時代から死刑が絞首刑に変更された明治十三年（一八八〇）まで続いていた。

死体は、杉田玄白が刊行した『解体新書』の研究材料だったり、肝臓や脳、胆嚢といった内臓を労咳に効く薬に製造したり、遊女が男と愛を誓う約束の証として小指を代理提供するためだったりと多方面で売買されて、相当な副収入があったと言うから驚きだ。

七代目の山田浅右衛門吉利は、若い頃、剣術道場の中でも知られた遣い手であったが、ある試合で相手を死なせて浪人となり、この家業を継いだとも伝えられる。

表向きは冷徹で寡黙。だが吉利は、夜になると酒を片手に詩や俳句を嗜んだ。書き残した紙片には「命とは、見えぬ花のごとく咲き、斬られてなお香る」とあったという。

また、吉利の屋敷には供養の塔が設けられており、斬った罪人たちの名をひそかに記して手を合わせていたという伝承もある。

『首切り浅右衛門』とか『人斬り浅右衛門』とかと

呼ばれていたが、ただの執行人ではなかった。死を見つめ、斬ることで『生』を問い続けた、もう一人の『無名の思想家』であったのかもしれない。

いつからか、夜になると夢の中に白い犬が現れるようになった。

毛並みはよく、尻尾をゆらりと振りながら、吉利の前にぬっと座り込む。ただ、何も言わず、こちらをじっと見つめているだけだ。

名を呼んでも返事はない。けれども、犬の視線の奥に、どこか懐かしい顔が映る気がする。

吉利は、黙ってそれを見つめ返す。いつもそれだけだ。夢はそれで終わる。

斬首を業とし、御様御用としての家を継ぎ、剣とともに生き、死とともに眠った男。それが山田浅右衛門吉利の生涯だった。

晩年の吉利は、屋敷の片隅に座しては、黙って筆をとる日が多かった。墨は乾き、紙は重ねられてゆくが、そこに書かれた文字は次第に淡く、意味を失っていった。

時折、筆先に何かを問うような目を向ける。けれど、答えはどこにもない。

——何人斬ったか、と問われれば、答えられる。

——どの刀がよく切れたか、と聞かれれば、即座に列記できよう。

だが、「何を見たか」と問われれば、吉利は黙した。

松陰の目の奥にあった光

左内が俯かずに詠んだ句の声

それらは吉利の記憶の水面に、波紋のようにいまも残っていた。

ある夜、文吉がこう言った。

「親方……もし来世というものがあるなら、何になりたいですか？」

吉利は少し笑った。そして、ぽつりと答えた。

「……木の根でも、よいな」

「え？」

「何も語らず、何も裁かず、ただ地を抱いて生きる。あるいは……人の忘れた供養塔の下にでも、生えている苔となつてな……」

文吉はその言葉の意味を測りかね、ただ静かに茶を

注ぎ直した。

\*\*\*

やがて、時代は移り変わり、斬首刑は廃され、山田家もその役目を終えた。

明治十三年（一八八〇）に麴町の屋敷は人の手に渡り、やがて地図からも消えた。ただ、祥雲寺（池袋）の墓地の一角に『山田吉豊之塔』と刻まれた碑がぼつりと建っているだけだ。吉豊とは七代・吉利の子で、八代目の浅右衛門である。

傍らには、乱雑に積まれたような墓石があり、かつて罪人の髻を埋めたとされる供養塔も、半ば地中に沈んでいる。

夜になると、そのあたりで白い犬が鳴くという。

それは風の音かもしれない、昔語りの迷い声かもしれない。

ただ、塔の下の苔だけが、なぜかいつもひとときわ青く、瑞々しく光っているという。

誰もそれを確かめようとはしない。あるいは、それが答えなのかもしれない。

（了）

「首斬り三篇」第二話

近藤勇を斬首した男



【プロローグ】

板橋平尾宿の処刑場。

介錯人の「ヤツ」という掛け声と同時に、近藤勇が斬首された。周囲の空気が張り詰める中、首は穴に落ちていった。血飛沫は舞わず、近藤の命は静かに絶たれた。

時に慶応四年（一八六八）四月二十五日。「忠誠心で節義に殉じる」「死を以って恩義に報いる」という趣旨の漢詩が辞世の句だった。

農民出身の近藤は刀剣の道を極め、江戸幕府直参の旗本にまで昇り詰めた。「武士」の身分を手にしたが、武士として許されるべき「切腹」は叶わず、「斬首」の刑を受けることとなった。

近藤勇を介錯したのは横倉喜三次（きそ

うじ)。

これは、近藤勇と横倉喜三次という二人の剣士の出会いと絆の物語である。

### 【戊辰戦争の始まり】

会津藩は徳川家への忠誠を貫き、京都守護職を務めた松平容保を中心に幕府を支えていた。その中で、新選組は会津藩の御預かりとして活動し、京都の治安維持や尊王攘夷派の鎮圧に尽力する。

新選組の「誠」の旗印は、会津藩の士道「忠義」を象徴するものであり、両者の関係は深い絆で結ばれていた。

慶応三年（一八六七）十月十四日、徳川慶喜は政権を朝廷に返上して（大政奉還）

將軍職を辞し、二百七十年続いた江戸幕府による支配体制は終焉を迎えた。

しかし、新政府軍（官軍）と旧幕府軍の間で内戦が始まる。慶応四年（一八六八）一月、「鳥羽伏見の戦い」が発端の「戊辰戦争」だ。

翌月には官軍が東海・東山・北陸道の三道から東征を開始し、東山道軍は中山道を進軍した。これに対し、旧幕府軍の新選組局長の近藤勇らは甲陽鎮撫隊を組織し、最後の抵抗を試みるが惨敗する。

この物語は慶応四年四月の出来事であり、まだ序盤戦のこと。この後も明治二年（一八六九）五月の箱館戦争まで続いていく。

この後のことは他の書籍に委ねたいが、近藤勇や土方歳三をはじめとする新選組の隊士たちは会津藩と共に戦い抜き、最後まで忠

義を尽くした。

### 【流山での別れ】

慶応四年（一八六八年）四月二日。

昨夜遅く、丹後の渡して江戸川を渡り、  
下総国・流山に移動してきた。

春まだ浅い流山の空は、どこか薄曇りであった。野に咲く菜の花は風に揺れ、遠くから子どもたちの笑い声が聞こえていたが、その光景とは裏腹に、野営地の空気は張り詰めていた。

野山に囲まれた広場にて、「大久保大和」と偽名する新選組局長・近藤勇は農兵ら二百二十七人を前に軍事訓練を行っていた。

近藤の声は、依然として鋭く、堂々としていた。剣を捨てて銃を持ち、新たな時代を見

据えた訓練である。だが、その瞳の奥にはどこか深い陰りがあった。

「・・・我らは幕府の命に従い、この地に駐屯している。ただそれだけだ。」

そう語る近藤の言葉を、部下たちは信じて疑わなかった。しかし、都では鳥羽伏見の戦いが終わり、甲州勝沼の戦いでも敗戦を余儀なくされ、新政府軍が急速に勢力を伸ばしていることを、近藤は誰よりも理解していた。

「内藤隼人」と偽名する新選組副長・土方歳三が馬を飛ばして流山に駆けつけたのは、その翌日四月三日の朝だった。新政府軍の間もなくこの地に到着するという急報を携え、額には汗が滲んでいた。

「近藤さん、早まるな。投降するな。」

土方は拝み通すように、近藤の両肩に手

を置き、涙を浮かべながら、そう説得した。その言葉は短く、鋭く、近藤の胸に突き刺さった。

土方は続けて

「われらは鎮撫隊であり、新政府軍に齒向かう者ではない。されど——投降は死を意味する。」

と説いた。近藤はうなずかず、黙って空を見上げた。風が枝を揺らし、若葉が光を反射していた。

かつて、仲間と共に剣の道を歩んできた日々が、遠い記憶の彼方に蘇った。試衛館で汗を流し、剣を交えたあの頃。皆が笑い、語り、未来を夢見ていた。だが、その夢は、血に塗れて消えていった。

「歳……わかつている。だが、ワシはこの命を

もって、戦を止めたい。」

そう言った近藤の声は、震えていた。

土方は瞠目し、拳を握りしめる。

「名は——大久保大和だ。それで押し通せ。それが我々を守る唯一の方法だ。そして、必ず助け出す。大勝は、俺の……新選組の魂だ。」

土方の目に涙が光る。武士として、男として、決して見せることのなかった感情が、その刹那、噴き出した。

近藤は土方の肩に手を置き、静かにうなずいた。

「ありがとう、歳。お前に会えて、本当に良かった。」

その日の夕刻、流山の近藤勇の陣屋「永岡家」に新政府軍が到着し、近藤勇は「浪士・

大久保大和」と名乗ったが、疑念を抱かれ、結果的には「出頭」を余儀なくされた。

隊士たちは茫然とその姿を見送った。誰も  
が叫びたかった。誰もが止めたかった。しかし、  
近藤の背中には、静かな覚悟が刻まれていた。

江戸川の矢河原の渡しを小舟で渡り、連  
行されるその姿。土方はただ、拳を握りしめ、  
近藤の背を見送った。再会を誓った別れ――。  
だが、誰もその日が来ることはなかった。

近藤は翌日四月四日四つ時（午前十時）  
に越谷宿へ連行され、その日のうちに板橋宿  
に連れて行かれた。板橋に着いたのは夕五つ  
時（午後八時）だった。

そしてその先に、近藤を見張る男――剣の  
達人、横倉喜三次が待ち受けていることを、  
近藤はまだ知らなかった。

### 【板橋宿での横倉喜三次との出会い】

越谷宿でも尋問がなされた。彦根藩士の  
一人が京都で近藤勇と面識があり、顔立ち  
や風貌が似ているとの情報が入ったからだ。

「貴公は近藤勇ではないか？」

「いや、大久保大和と申す。」

「近藤勇だと申す者もいる。」

「ワシは徳川家軍事方、松濤権之丞様の命  
により鎮撫の役を仰せつかっている。決して  
官軍（新政府軍）に齒向かう者ではない。」

「……左様か。いずれ、真か偽かわかるであら  
う。」

と身分の確認の問答がなされたが、確証が  
得られず、板橋宿に連行される。板橋宿には  
土佐藩士が多くいたため、土佐藩士の怨嗟

もあつたからだ。

そして、江戸・板橋宿。ここには、平尾宿、中宿、上宿と町が分かれている。

近藤勇は、最初は板橋中宿にある本陣の飯田宇兵衛宅。その後、脇本陣である板橋平尾宿の豊田市右衛門方に移され、幽閉された。

近藤は本陣の一室に通された。夜でもあり尋問は翌日に持ち越されたが、その夜、静かに目を閉じ、深い息を吸い込んだ。近藤の顔には恐怖の影はなく、むしろ穏やかな覚悟が宿っていた。周囲の喧騒が遠ざかり、近藤の心の中にはただ一つの思いが浮かんでいた。

「これがワシの運命ならば、受け入れよう。」  
その瞬間、近藤の瞳には一瞬の光が宿り、もうすでに覚悟を決めているかのようだった。

屋敷の奥にある土蔵が仮牢とされ、二畳ばかりの狭い畳敷き。窓には格子がはまり、外の光はわずかしか射し込まない。板の間は冷たく、春とはいえまだ朝晩は寒かった。

翌朝から平田九十郎らにより、再び尋問が始まった。

はじめは「大久保大和」であることを繰り返すのみの答弁であったが、平田が加納と武川という元新選組の一員を別室から大久保の顔を覗かせた。その二人は伊東甲子太郎とともに新選組から離脱し、伊東は暗殺されたが、二人は生き延びて薩摩藩に庇護されたという経緯があつた。

泰然自若と構えていた大久保であったが、二人が顔前に現われ、

「この者は近藤勇に相違ない。」

と、大久保に迫った。大久保は一瞬狼狽したが、一軍の将でもあり、観念して自身の前名が「近藤勇」であると認めただった。

その日（四月五日）のうちに、筵を引いた白洲に座らされ、罪人としての尋問が始まった。

官軍に対しての一切の異心はないこと

大久保一翁の命で「大久保大和」と改名したこと

松濤権之丞の命で、兵を率いて諸方を鎮撫する任に当たったこと

などと抗弁したが、徳川家の重臣の名前もあり、事実確認が必要となった。しかし、以下の理由や思惑もあって、近藤は「罪人として極刑に処すこと」が確定してしまう。

四月十一日に江戸城の新政府軍への引

き渡し正式になされたこと

土方歳三や試衛館の門人・福田平馬などが勝海舟に近藤の助命を嘆願したが、勝も近藤勇を弁護しなかったこと（つまり、見殺しにされたこと）。もし弁護に回れば、謹慎中の徳川慶喜にも罪科の波及が懸念されること

流山で近藤勇の配下にいた脱走兵を新政府軍が捕らえて吐露させたこと

など、近藤の勝算はなかった。

そして、松平容保公から拝領された『陸奥大掾三善長道』も土佐藩士・谷干城により没収されてしまう。

谷は坂本龍馬や中岡慎太郎を殺害したのは新選組の仕業だと信じて疑わなかった。現代の歴史研究家によれば、佐々木只三郎が

中心の『見廻組』によるものとの説が有力だが、その時は、土佐藩士はそう思っていて、「憎き新選組」「憎き近藤勇」だった。

そして、静かな幽閉生活が始まった。

四月十三日、番人として配置されたのは、剣の達人として知られる横倉喜三次政忠。横倉は新政府軍に協力する形で出仕していたが、その剣技は敵味方を問わず一目置かれていた。

横倉は昼夜を問わず近藤の傍らにいた。最初の数日は互いに言葉を交わさず、ただ沈黙の中に剣士としての緊張感だけが漂っていた。初めて横倉と対面した日、二人は互いの目を真っ直ぐに見た。

無言のまま、ただ鋭い眼光が交錯した。

だが、三日目の晩、横倉がふと口にした。

「貴殿、天然理心流と聞いた。どういう流派だ？」

近藤は少し驚いたような顔をし、やがて口を開いた。

「天然理心流は実戦を旨とする。いかなる相手に対しても動じない極意必勝の実践を教える。」

横倉は、じっとその言葉に耳を傾けた。沈黙のち、横倉は火鉢の灰をゆっくりと掻き混ぜた。

「……拙者も、身内を斬った。内通の疑いがあつた。だが、真偽は最後まで分からなかった。ただ、上の命なのでやむを得なかった。」

近藤はそれを境に、二人の間には言葉が増えていった。

ある晩、近藤は横倉の木刀を借り、狭い蔵の中で型を演じて見せた。

「まだ錆びついてはおらぬ」

と笑う近藤の動きは、かつての堂々たる剣士そのものであった。

「見事だな……拙者が貴殿と出会ったのが、もう十年前なら、一杯やりたかった。」

「そうか？今からでも遅くはない。牢で飲む酒も悪くないぞ。」

「馬鹿を言うな」

そう言いながらも、横倉は翌日、密かに二合もあろうかという酒瓶を手に入れて持ち込んだ。二人は一つの湯飲みに注ぎ、それを交互に口にした。

夜が更けた。

遠くで夜鷹の笛が聞こえた。

「眠れぬ夜だな」と近藤が呟くと、横倉もまた静かにうなずいた。

「お主、剣の道をどこで学んだ？」

と近藤が問う。横倉は一瞬、黙して考え、やがて口を開いた。

「拙者は美濃国揖斐を領する旗本岡田家臣の嫡男として生まれた。父が早くに亡くなったため十一歳で家督を継ぎ、天保十一年（一八四〇）十七歳のときに江戸勤番となり、小野派一刀流の酒井要人に入門した。」

近藤は横倉にますます興味を持ち出し、横倉も自分の半生について更に語り続けた。

「三年ほどで揖斐に戻ってからは同門の梅田棟太郎に入門し、次いで楊心古流柔術や中島流砲術も修得した。楊心古流柔術は江戸の戸塚彦介から学び、神道無念流免許皆

伝も受け、岡田家の武術指南役にさせてもらった。

幕府が終息を迎えつつある中で、東山道先鋒隊がやってきて、家老の柴山理太郎以下四十三名は勤皇を誓い、新政府軍に従軍した。拙者はこの時四十代後半だったが、副隊長を仰せつかった。

まず信州上諏訪で赤報隊の相良総三を斬首した太刀さばきが見事だったとか賞賛された。――前人が右肩に斬りつけて仕損じた後、拙者が撥ねた相良の首は三尺ほど跳んで地に落ちた。」

と瞑想するように自分のことを語り続けた。むしろ近藤勇を敬うばかりに自身の略歴を知ってもらいたかったのだろう。酒の力も加わって饒舌だったが、二人の間に意気が統合し

始めていた。

「介錯をな？」

「はい。無益な苦しみを与えぬよう、ただ一太刀で終わらせる。それが、せめてもの礼儀と思っていた。」

そんな腕前を買われたのか、武蔵の忍まで行ったところで、この板橋の本営に呼び戻されたのじゃ。

拙者は近藤殿が松平容保公に信頼され、幕府を守り続けてきたことに敬意を表したい。」

近藤はしばらく黙し、その言葉を噛みしめた。

「あんた……その腕、ワシに使ってくれんか。」

「……」

「ワシは、犬死にではなく、武士として果て

たい。せめて一太刀で……苦しまずに済ませ  
てくれ。」

横倉はそれには答えず、またゆっくりと酒  
を注ぎ、近藤の前に差し出した。二人は杯を  
交わし続けていた。

そして、薄明の帳が、すでに夜の向こうに  
見え始めていた。

「土方は、今どこにいる？」

「分からん。きっと、戦を続けているだろう。」

ワシの分まで、生きるつもりでな。」

ふと、近藤の目に涙が浮かんだ。

「ワシは、夢を見たんだ。江戸の町で試衛館  
を義父から引き継ぎ、子どもたちにも剣を教え  
ている夢だ。血も涙もない、ただ真っ直ぐな剣  
の道をな。」

横倉はその言葉に何も返さなかった。ただ、

火鉢の灰を見つめていた。

やがて新政府軍が正式に近藤の極刑を決  
めた。

その罪状は「勝手に徳川家の家来を名乗  
り、甲州、および流山で暴挙を犯した」もの  
とされている。徳川慶喜を守るためにも「新  
政府軍に対する敵対行為を許した」などと  
旧幕府軍の首脳は言えなかった。

近藤に寛典を求める声も多かった。横倉も  
口にはしないものの、武術家同士の親近感、  
いまは敵味方といえ、元は佐幕に仕えた身で  
あり、同情の念が生まれていた。

ある夜、近藤は、ひとり床に座り、目を閉  
じていた。

芹沢の暗殺、池田屋の戦い、山南敬助の切腹、伊東甲子太郎の裏切り——数々の出来事が脳裏を巡る。

「ワシは……新選組を守るために人を斬った。そして、その剣がワシ自身を滅ぼすのだろう。」

近藤の独白を、横倉は背後で聞いていた。

「……近藤殿」

「なんだ？」

「もし斬られるなら、拙者の手で終わらせてやりたい。剣士として一太刀で。」

近藤は静かにうなずいた。

「それが、ワシにとつての名誉だ。ありがとう、横倉殿。そなたにこの脇差を贈ろう。」

近藤は最後に一尺八寸の脇差『二王三郎清綱』を横倉に贈った。

このとき、剣士としての友情は、言葉以上

の形で結ばれていた。

なお、近藤が横倉に贈った『二王清綱』で自分を斬ってほしいとの思いがあったのか、実際に使用したのかどうか、大刀でもないので無理がある、など諸説ある。

斬首刑が言い渡され、その執行日の前夜、近藤が横倉に語った最後の言葉は、

「横倉殿、剣は人を守るものか？それとも、奪うものか？」

近藤は死の間際、そう自問するように横倉に語ったという。

横倉は答えを出せなかった。

### 【近藤勇、命尽きる】

慶応四年（一八六八）四月二十五日、まもなく夕闇に包まれてしまいそうな刻だった。

江戸から北へ延びる中山道平尾一里塚の脇、寿徳寺の馬捨て場（埋葬場）ににわかには設けられた小さな刑場。処刑場の空は灰色に染まり、重い雲が低く垂れ込めていた。その地に、冷たい空気が張りつめていた。

板橋宿本陣と一里塚に掲げられた高札文を読んだ群衆が処刑台の周囲に集まり、誰もが息を呑んでその瞬間を待っていた。準備や警備を司る板橋宿岡田家の役人が二百五十人もいたというから物々しい処刑であったことを物語る。近在の百姓達を含めれば三百人以上の目が処刑台に向かっている。

処刑に立ち会う新政府軍の兵士たちが沈黙を守る中、ひとときわ背の高い男が一步前に出る。剣士・横倉喜三次。その顔には、これから斬るべき男への、深い覚悟と静かな敬意が

あった。横倉はその光景を見つめ、人々のざわめきが風に乗って耳に届き、横倉の心をさらに重くした。

横倉は拳を握りしめ、目を閉じた。

「これが本当に正しいことなのか？」

横倉の心には答えのない問いが浮かんでいた。

一方、刑場の一角には人知れずひとりの若者が立っていた。

近藤勇の養子、宮川勇五郎（のちに近藤勇五郎と改名）——その面差しには幼さが残りながらも、義父の最期をしかと見届けようとする気迫があった。

やがて、静かに足音が近づく。

近藤勇が、淡い藍の着物に白袴という簡素な装いで姿を現した。手は後ろで縛られ、

顔には驚くほどの平静が宿っていた。

その場にいる誰もが、次の瞬間に何が起こるかを知っていた。だが、近藤は一步ずつ、迷いなく進んでいく。やがて刑場の中央にたどり着くと、近藤は深く一礼し、跪いた。

もうこれでこの世を去るのだな……と目を閉じると、試衛館のことが回想された。

(……試衛館の庭に、白梅が咲いていた。

厳しい稽古のあとの、湯気立つ味噌汁の匂い。

近藤周助先生の厳しくも温かい声、

沖田総司の、あどけない笑い声……)

皆の顔が、最後の春風に乗って、静かに目の裏に浮かんだ。

そして、ゆつくりと口を開いた。

「孤軍援絶えて俘囚となり、顧念す君恩、

涙更に流る。一片の丹衷、能く節に殉じ、睢陽千古、是れ吾が儔。」

(孤立無援となつて捕らえられた今、君(將軍)への恩を思い返すと、自然と涙があふれる。私の赤心(まごころ)は最後まで節義に殉じた。睢陽(中国・春秋時代の忠臣)のように、私もまた歴史に殉じる者となった。)

さらに続けて、

「他になびきて今日また何をか言わん。

義を取り生を捨つるは吾が尊ぶ所。

快く受けん電光三尺の劍、ただ将に一死をもつて君恩に報いん。」

(他の勢力に靡いて、今さら何を言い訳できようか。義のために生を捨てる、それこそ私の誇りである。電光のごとき三尺の劍を快く受けよう。ただ、この一命を捧げて、主君(徳

川)の恩に報いたいのだ。)

その声はかすかに震えていたが、意志は真  
っ直ぐだった。

辞世を詠み終えたその時、近藤はふと視  
線を動かした。

観衆の中にいた勇五郎と目が合った。

勇五郎の瞳が大きく見開かれ、義父と目  
が合った。それだけで、涙がこみ上げた。

声を上げることはできなかった。ただ拳を  
強く握りしめ、その場に立ち尽くす。

そのとき、処刑人・横倉が一步前に出た。

太刀の柄に手をかけ、静かに抜く。光を浴  
びて刃がきらめいた。

「――参る」

声は静かで、そして重かった。

そのまま、横倉は一步、また一步と近藤に

歩み寄る。

そして、一太刀。

それは風を切り、音さえ立てずに落ちた。

血の飛沫はなく、近藤勇の首は、まるで彼  
自身の意志でそうしたかのように、静かに地  
に伏した。

完璧な一太刀――それは、剣士としての  
横倉の矜持であり、敬意の証でもあった。

兵士たちは声を失い、誰もがその一瞬の重  
みを噛みしめていた。

横倉は太刀を地に下ろし、深く頭を垂れ  
た。

それは、敵に対してではない。

時代を駆け抜け、忠を尽くし、死に臨んだ  
男に向けた、魂の礼だった。

その光景を、勇五郎は息を呑んで見届け

ていた。

——後年、勇五郎はこう語っている。

「丈の高い人は、ヤツというと、一太刀で切りましたが、まことにみごとな腕前で、六十何年経った今でも感心しております。」

### 【エピソード——近藤と横倉の魂とは】

近藤の首はその後、京都・三条河原に晒されるという過酷な運命を辿る。

だが、横倉喜三次は介錯による報奨金を全てつぎ込んで、自身また主君の捐斐藩主西尾家や岡田家の菩提寺である「松林寺」にて近藤の密葬を執り行い供養した。そして、その墓前には、わずかに薄酒と桜の枝が手向けられていた。

近藤の処刑がなされた僅か半月ほど後の

慶応四年閏四月十六日のことだ。

各地でまだ戦闘（戊辰戦争）が続いている最中。しかも「賊」とされた旧幕府軍の慰霊者に対する供養であり、新政府に知れたら如何なるお咎めを受けるかわからない状況下にあつたはずである。武士として、また漢（おとこ）として二人に相通じるものがあつたこそ横倉の為せる業だつた。

「拙者は剣士として、貴殿を斬つた。だが——友として、語らい合つた夜を、忘れることはない。」

そう呟いた横倉の肩に、一羽の雀がとまり、そして空へ舞い上がった。

その後の土方歳三。

近藤勇の死からおよそ一年後——土方歳

三は箱館の地にいた。旧幕府軍の残党として、五稜郭に立てこもり、新政府軍に最後の抵抗を試みていた。だが、もはや勝ち目はないと知りながら、土方は馬上で吠えた。

「近藤さん……あんたの分まで、俺は戦い抜くぜ……」

空は、どこまでも遠かった。

義父の最期を見取った宮川勇五郎。

のちに近藤勇の一人娘瑤子と結婚し、近藤勇五郎と名乗ったその少年は、義父の無念を胸に、ひそかに剣の道を学び続け、のちに天然理心流五代目宗主となり、府中に剣術道場『撥雲館』も建てた。決して剣を振るうことはなかったが、義を忘れぬ姿勢は晩年まで変わらなかった。

「父のような男になりたかった……」

その思いを胸に、勇五郎は静かに時代を生き抜いた。

横倉喜三次。

近藤勇の処刑前夜、近藤が自問するよう横倉に語った言葉を思い出していた。

「剣は人を守るものか？それとも、奪うものか？」

横倉は答えを出せずにいたが、のちにこう思った。

「剣は、魂を映す鏡である」

横倉はその後、剣を捨てた。人を斬る手では、もはや刀を握る資格がないと考えたからだ。

横倉は地元の揖斐に戻り、治水関係の仕

事に就き、その合間を縫って、自身の道場に  
て剣術と柔術を教えていた。

毎年の藤勇の命日の四月二十五日、桜が  
散る頃にだけ、彼は墓前に立ち、近藤から授  
かった脇差『二王清綱』に献花、献酒して冥  
福を祈った。

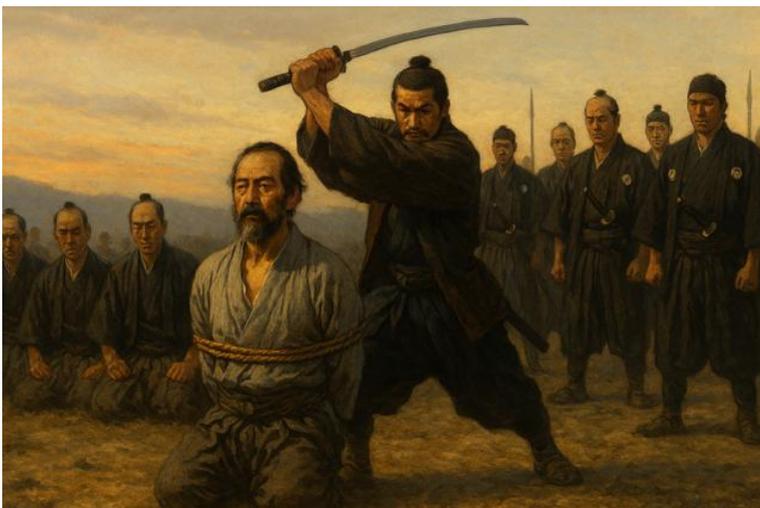
「近藤殿——来世では、共に酒を酌み交わ  
したいものよ。」

そう呟く声は、風に溶けて、どこか懐かし  
い香りがした。

(了)

「首斬り三篇」 第三話

小栗上野介の処刑



【プロローグ】

「偉人小栗上野介罪なくして此所に斬らる」

群馬県高崎市倉渕町の静かな山間に、ひとつの石碑が佇む。そこには冒頭の文字が刻まれている。

慶応四年閏四月六日、徳川幕府の重臣であり近代化の先駆者であった小栗上野介忠順は、家臣三人とともに、何の取り調べもなく水沼川原で斬首された。

小栗の死は、明治新政府の成立とともに歴史の闇に葬られたが、その功績と最期の真実は、今もなお語り継がれている。

【小栗上野介の処刑】

閏四月六日、夜明け前。

水沼川原の土手に、まだ春の名残を留める霧がたちこめていた。薄靄の向こうに、数十人の男たちの影が揺れている。中ほどに立つ小柄な人影が、ひとときわ静かな気配を漂わせていた。

「これが……このような形で終わるとはな」

小栗忠順は、淡々とした声でつぶやいた。年齢は四十二、しかしその表情には老いよりも静かな諦観があった。

同行していた三名の家臣——中村、吉田、山田は、小栗の少し後ろで跪いていた。彼らもまた、命の終わりを目前にしながら、不思議と動揺の色を見せていない。ただ、それぞれの顔に、言葉にできぬ怒りと無念が張り付いていた。

「上様……」

中村が震える声で言いかけたが、小栗は軽く首を振った。

「よい。泣くでない。……これで終わるが、我らの信念が虚しかったとは思っておらぬ」

小栗の声音は、どこまでも静かだった。かつて幕府の軍艦奉行として、フランスから技師を招き、横須賀製鉄所を造り、日本の近代化を推し進めた男。戦火を逃れ、農夫となって土を耕すことを選んだ男が、今、何の取り調べもなく、早朝より斬首という形で処刑されようとしていた。

罪状の明示なし

弁明や弁護の機会なし

武士の名誉ある死とされた切腹の権利も与えられず

誰が見ても考えても酷い処刑だった。

近くの林の陰に、数人の農民がひっそりと集まっていた。誰も声を上げず、ただじつとその場を見守っている。

小栗が領内に戻ってからというものの、村の者に理不尽な命令をしたことは一度もなかった。むしろ、荒れた田畑を共に耕し、飢えに苦しむ者には食料を与え、時には病人の家まで薬を届けに行った。

「罪なき者が、斬られるか……」

木陰にいた老人が、誰にともなくつぶやいた。その老人は小栗の手で再び田を得た百姓だった。斬首刑の知らせを聞き、居ても立つてもいられず、足を引きずるようにしてここまで来たのだった。

程なくして、新政府軍（東山道鎮撫軍）の役人がゆつくりと前が出る。原保太郎である。

原は命令書のような巻物を広げるが、誰も聞こうとはしない。文面などどうでもよい。これは見せしめであり、恐怖によって新政の威光を示すための儀式であった。

「小栗忠順、ならびにその家臣三名。国家に仇なしといえども、旧幕の重臣として政治を誤り、これを誅する」

原の声が、風に消されるように低く響いた。小栗は、最期にもう一度、空を見上げた。

朝の陽が、川面に光を投げ始めている。

「妻は……倉淵を出たか」

問い掛けるように呟いた。確かに、処刑の前夜、密かに村人に命じて母と妻と息子の許嫁を逃した。それだけが今の心の救いであった。原には「どうか婦女子の寛典を願いたい」とだけ言い残した。

小栗には辞世の句を読む時間も与えられず処刑される。

「たらちねの母が祈りしその夢も破れて果てし 倉渕の露」

とは、後世に『小栗上野介の辞世』として伝承や創作されている句であり、本人の気持ちを良く代弁されていると思うが、虚しさは拭えない。

小栗は膝をつき、首を垂れる。そして、一言、「我が死をもって、倉渕の里に害が及ばぬのならば、それで良い」

処刑人が刀を抜いた。乾いた風に混じって、村人の誰かがすすり泣いた。

一刀目は深く入らず、血がほとぼしかった。処刑人の手が震えていた。二の太刀で、ようやく小栗の首が地に落ちた。

斬られたその顔は穏やかだった。

川原には再び霧が立ちこめた。声をあげる者もなく、ただ静かに――

### 【開化の礎】

江戸の終わり。

時代は腐敗し、幕府は揺らいでいた。西からは維新の風が吹き寄せ、政（まつりごと）の形も、武士の誇りも、音を立てて崩れ掛けた。

「このままでは、日本は滅ぶ」

小栗上野介忠順は、誰よりも冷静に、そして誰よりも切実にそれを感じていた。

身分は旗本ながら、小栗は『実務官僚』として群を抜いていた。勘定奉行、外国奉行、陸軍奉行を歴任し、時に老中の井伊直弼に

も意見を申し立てたその胆力と知性は、幕府内でも異彩を放っていた。

だが、その目は常に「徳川の中」ではなく、「この国の行く末」を見ていた。

慶応二年（一八六六）、小栗は横須賀にフランスの技術を導入し、製鉄・造船・兵器の生産を一貫して行える「横須賀製鉄所」（後の海軍工廠）建設を決定する。資金も技術者も自ら調整し、国際交渉にあたっては、流暢なフランス語で相手をうならせた。

「日本が独立を保つには、自前の技術、自前の軍備が不可欠なのだ」

外国奉行時代に欧米の近代国家を見聞してきた小栗は、ただ文明を輸入するのではなく、国の根幹を“自力でつくる”ことの重要性を誰よりも理解していた。

当時の幕閣は、小栗の進言を理解できる者と、できぬ者にとに割れていた。

むしろ、多くの同僚たちは小栗を「冷徹な改革者」と見なし遠巻きにした。

ある夜――江戸城内、長い廊下を歩いてた小栗に、側用人の一人が声を掛けた。

「上野介、あなたはそれほどまでに、この幕を守りたいのですか」

小栗は立ち止まり、闇の中で少しだけ首を横に振った。

「違う。この幕が減ぶのはやむを得ぬことだが、この国が減びてはならぬのだ。私はそのために動いている」

その言葉には、権力への執着も、体制への忠誠もなかった。あるのは、民の暮らしと国の独立を守るための冷徹な覚悟だった。

慶応四年（一八六八）正月、鳥羽伏見の戦いで幕府が敗れ、新政府が台頭し始める。

徳川慶喜は敗北の責任を取り、将軍職を辞し、静かに恭順の意を示した。

小栗はなお、混乱の中にあつて国の建て直しに動こうとした。

だがその意志は、将軍からのひと言で封じられる。

「上野介、そなたには登城を控えてもらいたい。新政府の目もある。無用な誤解を避けねばならぬ」

主命であつた。小栗はわずかに眉をひそめたが、すぐにそれに従い、潔く政務の場から身を引いた。

——国を思えばこそ、動かず耐えるべき時

もある

その決意を胸に、小栗は静かに自領の上州倉漕の地へと戻っていった。

「いずれこの国に、真に未来を築く人間が現れよう。その時、我が志が理解されることを願う」

そう言い残して、武士としての肩書を捨て、鋏を持ち、村人とともに田を耕した。

小栗が築いた横須賀製鉄所は、後に明治政府によって「横須賀造船所」として引き継がれ、日本の近代海軍の母体となる。

幕府が崩れても、小栗の志は静かに生き残った。

しかしその時、小栗はまだ知らなかった。

新政府が小栗の名を「危険人物」として記し、その命を狙っていることを——。

このようにして、小栗の功績は一部の理解者の間にとどまりながらも、国家の背骨として形をなしていく。

だが、倉渕の静寂に包まれた日々の裏で、冷たい包囲の輪が徐々に迫っていた。

そして、歴史は再び、小栗を『断罪すべき対象』として呼び戻すことになる。

### 【新政府軍、倉渕を包囲する】

上州倉渕。四月の風はまだ冷たく、谷筋に咲く山桜がわずかに春を告げていた。

小栗忠順は、藁葺きの屋根の下で静かな暮らしを送っていた。

かつては江戸の城中で政（まつりごと）の重きを担っていた男が、今は鋤を手に田を耕し、村人と共に汗を流していた。

「こんなにも静かな日々があるとはな……」  
笑みをこぼす小栗の姿に、家臣たちもまた心を和ませていた。

中には、仇なす新政府に対して憤る者もいたが、小栗はそのたびに、穏やかに言った。

「武士たる者、怒りで事を動かしてはならぬ。今は、耕すことこそ、国を支える道だ」

しかし、その平穩は長くは続かなかった。

ある日、村の若者が山道を駆け下りてきた。<sup>34</sup>

「小栗さま、新政府軍が……っ！」

息を切らしながら叫ぶその声は、谷あいには響き渡った。

「高崎からの道すじに兵が出ている。人数は百を超えていると……」

家臣の一人が眉をひそめる。

「なぜ今さら……もう將軍家も降伏している

というのに。小栗さまが何をしたと？」

「罪はない」と小栗は静かに言った。「だが、今の世にとつて、私は過去の亡霊なのだ」

日が落ち、倉渕の山里に焚き火の煙が立ちのぼる頃、小栗邸では、家臣三人と小栗が火を囲んでいた。

「敵の狙いは、おそらく小栗さまお一人。われらが身を挺して道を切り拓きますゆえ、どうか、お逃げを」

最年少の家臣・荒井が頭を垂れる。

しかし、小栗は首を横に振った。

「無駄死にはせん。命乞いもせぬ。だが、抗うつもりもない。戦は終わったのだ。残すは、どう死ぬかだけだ」

その言葉に、誰もが口を閉ざした。

小栗は夜空を見上げた。

冷たい月が、雲の切れ間から顔を出していた。

「私の志は、この地に蒔いた。もしも未来が正しければ、誰かがそれを拾い、育てるだろう」  
その言葉が遺言となることを、家臣たちは悟っていた。

翌朝、村は騒然としていた。

新政府軍が、倉渕に到達したのだ。

小栗忠順と家臣三人は、村外れの道で馬を降り、ゆっくりと歩いてきた軍兵の前に、整然と立ち尽くしていた。

「徳川の上野介、小栗忠順、ここにあり」

その声は、山にこだました。だが、それに応じる声はなかった。

銃剣を構えた兵たちの目には、敵ではなく、

歴史の異物を見るような冷たさが宿っていた。

そしてそのまま、小栗ら四人は縄を打たれ、水沼川原へと連行されていった。

裁きもなければ、取り調べもない。

時代の奔流が、小栗を押し流そうとしていた。

とそこに進んでゆく。

見届ける村人は遠巻きに立ちすくみ、ただ沈黙していた。

目の前で何が行われようとしているのか、分かっていても、誰も言葉にできなかった。

家臣たちは毅然とした面持ちで首を垂れ、最後のときを悟っていた。

そして、小栗はただ静かに、空を見上げていた。

曇天の合間から、薄陽が射していた。

小栗は最後まで何も言わなかった。

辞世の句もなければ、最期の言葉も記されてない。

いや——それを「許されなかった」と言うべきなのかもしれない。

本来であれば、小栗ほどの武士に対しては

### 【処刑の波紋】

慶応四年（一八六八）閏四月六日、まだ

春の冷気が肌を刺す早朝。

倉渕村、水沼川原には、すでに物々しい空気が張り詰めていた。

木立の中、粗末な杭が四本打たれ、簡素な縄が垂れていた。

小栗忠順と家臣三名——萩原三圭、服部四郎三郎、荒井郁之助——その姿が、肅々

切腹が許されるのが筋であったが、新政府はそれを許さなかった。

なぜか。

それは、小栗の死を「美しく」してはならなかったからだ。

小栗忠順——幕府の財政を立て直し、軍備を整え、横須賀製鉄所を築き、日本の近代化を夢見た男。

その手腕はあまりに優秀であり、あまりに先進的であった。

新政府にとって小栗は、旧体制の中樞を担った『危険人物』であり、放置すれば再起の象徴となりかねない。

潔く切腹させてしまえば、むしろ『忠義の士』『悲劇の英雄』として語り継がれてしまうが、それを恐れたのだ。

ゆえに、ただ無言で首を斬る。理由も示さず、武士の尊厳も与えずに。

それは「見せしめ」であり、「抹殺」だった。

肉体だけでなく、精神までも断ち切る行為だった。

小栗の首は晒されることこそなかったものの、その死に名誉は与えられず、

記録にもろくに残されず、小栗はただ『反新政府の一武士』として歴史の闇に沈んでいった。

だが、死は終わりではなかった。

水沼川原に咲く山桜が、毎年花をつけるように——

小栗忠順は時に四十二歳。小栗の無念もまた、人々の記憶に静かに根を張っていった。

なぜ小栗は斬られたのか

その死に正義はあったのか

その功績は、誰が語り継ぐのか

戦後、時を経て、小栗の名は徐々に再評価され始める。

近代日本の礎を築いた人物の一人として

横須賀製鉄所の礎を築いた技術行政の先駆者として

混乱の時代に信念を貫いた一人の武士として

やがて、小栗の最期の地である倉渕には、こう刻まれた碑が建てられた。

「偉人小栗上野介罪なくして此所に斬らる」

その碑には、名もなく命を落とした者たちの代わりに、歴史が与えた、ささやかな正義の回復だった。

冷たい風が碑の上を吹きすぎる。

けれどその足元には、もうひとつの春が、静かに根づいていた。

### 【石に刻まれた想い】

群馬県高崎市倉渕町。

山と川に抱かれたこの静かな地に、ひとつの石碑がある。

「偉人小栗上野介罪なくして此所に斬らる」<sup>38</sup>  
高さ一メートル余りの素朴な碑だ。

その言葉は、明治や大正の文人によるものでもなければ、政府の手によるものでもない。

これは地元の有志たちが、長い時を経て、語られなかった真実と、報われなかった名誉を取り戻そうとして建てたものだった。

倉渕の人々にとって、小栗忠順は今も『殿

様』と呼ばれている。

小栗は幕府が崩れた後も、ただの逃亡者になることなく、倉漕の開墾と復興に力を注ぎ、村人と共に生きようとしていた。

だが、その志半ばで、新政府軍により突然断たれる。

「反新政府」「容疑者」として命を奪われ、切腹すら許されず、名誉も剥ぎ取られ、歴史の中に置き去りにされた一人の男。けれど、小栗の死は村人の胸に深く刻まれた。

そして、時代が変わった。

戦後、軍政から民政へ、日本が再び立ち上がるうとした頃、近代国家の礎を築いた先人たちの功績が見直されはじめた。

横須賀製鉄所、会計制度の近代化、外交交渉の手腕——小栗上野介忠順という名は、

再び光の下に現れた。

そして平成十一年、小栗の功績を称える碑が、東京都港区の芝・増上寺に建立された。その名は「開国の志士 小栗上野介忠順顕彰碑」。

ようやく中央の地でもその名誉が取り戻されることとなったのだ。

碑の前に立つ人々の中には、幕末に詳しい者もいれば、ただ旅の途中に訪れた者もいる。だが、皆が静かにその石碑を見つめ、目を伏せる。

そこには、確かに歴史の声が宿っている。

一人の男の死が、いかに理不尽で、いかに時代に消されたとしても、その生き様は、後の時代を生きる者の記憶の中に、確かに残る。春の陽が、碑の表面をやわらかく照らして

いた。

まるで、ようやく名誉を取り戻した小栗の魂に、そっと光が降りそそぐように――。

明治に入り、時代が移り変わっても、小栗上野介の名は公にはほとんど語られることがなかった。小栗の残した功績――横須賀製鉄所の建設、鉄道敷設計画、海軍創設の礎、財政改革の手腕――それらは『近代日本の設計図』ともいえるものであったが、新政府にとっては『旧体制を支えた頭脳』として、不都合な存在だった。

だが、歴史は静かに、確かに見直されていく。

小栗忠順の菩提寺である東善寺――群馬県高崎市倉渕町にあるその寺では、代々の

住職が小栗の名誉回復に尽力し続けてきた。境内には小栗の墓所があり、その隣には、処刑ののち親族の手で密かに埋葬された遺髪塚が静かに佇む。

寺には、小栗が海外視察の折に持ち帰った書籍や道具、直筆の書状が大切に保管されている。なかでも注目されるのが、小栗がパリで見たナポレオンの墓に感銘を受け、帰国後に『国の英雄が顕彰される社会』を日本にも根付かせたいと語ったという逸話である。小栗の願いは無残にも断られたが、その遺志は寺に保管されている記録の中で静かに語られている。

昭和の時代に入ってから、住職自らが資料を収集・公開し、講演活動や出版を通じて小栗の真の姿を社会に伝えようと奔走し

た。境内には「偉人小栗上野介之墓」と刻まれた墓碑が建てられ、小栗の命日である四月六日には、今も地元住民や遠方からの参拝者が訪れ、法要が営まれている。

住職は語る。

「小栗の死は、『逆賊』ではなく、『国を想いすぎた者の悲劇』です。今の日本がここまで来られたのは、小栗忠順のような人がいたから。忘れてはならないと思うのです」

その言葉の重みは、寺の静けさの中に深く染み渡る。

さらに平成、令和と時代を越えるなかで、小栗忠順の存在は再評価され、彼の歩んだ道は「明治維新のもう一つの物語」として知られるようになった。学校教育でも取り上げられるようになり、小栗の構想した横須賀製

鉄所跡は世界遺産登録を目指す文化遺産として整備が進められている。

倉渕の地にも、やがて一つの石碑が建てられた。明治末、小栗の名誉を静かに語り継ぐと願った人々によって――。

それはただの記録ではない。理不尽に命を絶たれた一人の知将への、遅れて届いた鎮魂であり、私たち現代人への問いかけである。

いま、水沼川のほとりに立てば、風が碑文を撫でていく。

――罪なくして、此所に斬らる。

武士としての名誉も叶わず、辞世も詠む暇もなく、無実のまま処刑された男。しかし、その死は忘れられず、静かに、確かに、時を越えて語り継がれていく。

もし訪れる者が耳を澄ませば、その声が聞

こえるだろう。

「この国を、どうか頼む」

### 【追記】

余談ながら、倉渕は筆者の亡き父が生まれた地。東善寺の裏山に本家（父の生家）がある。

小さい頃から祖父母の家でよく遊び、小栗上野介忠順終焉の地の水沼川原より三〇四キロ上流の烏川のほとりでも遊んだことがあった。

祖父母が亡くなったのは一九八〇年代だったと思うが、東善寺の住職さんが通夜・葬儀の際に読経されていたのを覚えている。小栗の菩提寺だと知ったのはその頃だったと思

う。

二〇二七年NHK大河ドラマ『逆賊の幕臣』が放映されることが発表されている。どんなドラマになるか楽しみだが、多くの方々に観てもらい、「倉渕町権田に石井家の本家がある」ことを自慢したい（笑）。

（了）